

いしふみ
夢の碑

高井有一

夢ゆめの碑いしぶみ

昭和五十一年八月二十日 印刷
昭和五十一年八月二十五日 発行

著者 高井 有一たかみ いち

発行者 佐藤 亮一さとう りょういち

発行所 株式會社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七十一

電話 業務(03)二六六一五一
編集(03)二六六一五四二
振替 東京四一八〇八

定価 二二〇〇円

印刷 二光印刷株式会社・製本 大口製本株式会社

© Yuichi Takai 1976, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

〈目次〉

一章	雨の祭	5
二章	終りの日々	22
三章	暑い夜	55
四章	冬木立	76
五章	鎖された部屋	129
六章	時代の子	149
七章	夜明けまで	215
八章	旅立ち	237

夢

の

碑^{いしぶみ}

一章 雨の祭

鷹舞^{たかまひ}の町の人たちは、祭のあとに秋が続いて来ると言ふ。三日間の祭の最後の日、夜通しの賑ひがやうやく果て、明るみが射して来る頃には、必ず、肌寒い風が町を吹き抜けると言ふ。

鷹舞の祭は喧嘩祭である。町を細かく分つ丁内ごとに山車を仕立てて曳き廻し、四つ辻で行き遭つては、互ひに道を譲らず、ぶつかり合ひ、押し合ふのであつた。昔は、高さ六丈、重さは二百貫にも及ぶ飾り山を、百人余りの若者が昇いで練り歩いた。丈を低くし、車に載せて曳く形に変つたのは、明治三十年代に入つてからである。

派手やかに飾り立てた山車のぶつけ合ひは、手足を縮めるやうにして過ぎなくてはならぬ長い冬を前に、精一杯の活力を発散させる儀式だと言つた人がある。祭が終つてしまへば、もう町には氣を浮立たせる何事も無い。ひたすら冬へ向ふ色の失せた時間があるばかりである。

河西堯彦^{たかひこ}は、その祭の最後の日の夕方、鷹舞へ着いた。雨が降つてゐた。朝、武市真木子の運転する車で、東北本線沿ひにある温泉町を発つて北上し、峠を越え、この三方を山に囲まれた町へ来るまで、小熄みなく続いた霧のやうな雨である。町の宿屋の、中庭に面した軒の深い部屋は暗く、硝子障子を明けてみると、分厚い苔が、音のしない雨を吸つてゐた。

「少し横になりたいわ」

中庭の向うの土蔵の、亀裂の入った白壁に眼をやつて、真木子は呟いた。

「疲れちゃつた。また、眼がをかしくなつてゐるでせう」

真木子の左眼は、右よりも目立つて大きく、その大きい眼の中の瞳が、疲れるとやや左に寄る癖がある。さうなると、自分の顔のやうではなくなる、と彼女は気にしてゐた。

「牀を敷いてもらほう」

と堯彦は、真木子と並んで足を投出し、熱い茶を啜つた。遠くで囃子の太鼓が緩やかに聞える。

「山で向うから車が来たら、きつと避けきれなかつたわね」

鷹舞の西方、町を見降す位置にある風張峠は霧が濃かつた。崖際の立木の影が次つぎに黒く現れるほかはすべてが消え、霧は、細目に明けた窓からも這ひ込んで、車内を鬱陶しく湿らせた。

真木子は、ハンドルの上にかぶさるやうにして、眼を据ゑ、道路の中央の白線を辿つて、のろく車を走らせた。頂上を過ぎて間もなく、堯彦が、晴れてゐればここから岩城湖が見える、と声をかけた時にも、領きさへしなかつた。

殆ど一時間を費して峠を越え、河沿ひの平坦な道に出ても、まだ彼女の顔は蒼かつた。

「肩が凝つた」

と息を吐いてみせる。車も人も通らない空虚な道がほぼ直線に延び、河には褐色の水があちこちに転がる岩を噛んで、繁吹をあげてゐた。

「霧は怖いわ」

真木子は座席に散らばつてゐた飴玉を一つ拾ひ、片手で器用に紙を剥いて口に入れた。少しづつ表情が和んで来るのが堯彦には判る。

「去年、蓼科の山道で霧に巻かれた時は、もつとすごかった。地面から霧が湧き上るやうに、あつといふ間に何にも見えなくなつて。仕方なく、車を止めて、身体をすくめてゐたわ。せいぜい三十分だつたと思ふけど、長かつた。不安なせいで、妙な幻覚まであつてね。車の傍に、大きな牛がゐるの。初めは一頭だけだつたのが、だんだんに増えて、しまひには、荒い息遣ひまで聞えて、怖くて、扉の把手を握り締めてゐたわ。霧が霽れて、もと同じ野原が見えて来た時、夢を見てゐたみたいだつたな」

そのとき、真木子は独りでロケハンに出掛けたのだといふ。彼女は主に宣伝映画を作るプロダクションのアシスタント・プロデューサーである。小さなプロダクションでは、多くの仕事を兼ねてこなさなくてはならなかつた。従姉の伊月祐子の家で初めて会つた日、真木子が、街中で撮影の帰りだと言つて、湯上りのやうに上氣した顔をしてゐたのを、堯彦は思ひ出す。仕事の昇ぶりが、まだ尾を曳いてゐたのであらう。堯彦が富士映画の宣伝部に勤めてゐるのを知ると、

「だつたら、毎日遊んでるやうなものでせうね」

と真木子は笑ひもせずと言つた。当時、映画は娯楽の主流を占め、堯彦のゐる撮影所でも、毎週二本づつの映画が製作され、満足以試写をする暇もないままに送り出されて行つた。そこには、雑踏する盛り場に似た昂揚と、投げやりな怠惰とがなひませになつて生み出す一種無機的な明るさがあり、その雰囲気は居心地の悪いものでないばかりか、時には、他の地味な社会に暮す人々への、謂はれのない優越感さへかき立てた。例へば、撮影中の映画の台本を、ズボンの後ポケットに突込んで通勤するといった風俗にも、それは現れる。堯彦が真木子の言葉に反撥しなかつたのは、彼もさうした感覚がいつか身に付いてゐたためである。

だが、あの頃は氣負つてゐてみつともなかつたらう、と堯彦との交りが深くなつてから、真木

子は洩らした事がある。

「どうかしてゐたのね。自分では、別に變つてゐないつもりでも」

堯彦と会ふ十箇月ばかり前、彼女は五年余り一緒に暮した男と別れてゐた。相手はプロダクションに出入りする無名の脚本家である。彼は九州へ取材旅行をすると告げて家を出、数日して指宿の温泉宿から、別れよう、と書いた手紙に女と二人浴衣姿で写つてゐる写真を同封して寄越した。ピントが甘く、表情もさだかでない写真だったが、女の顔に真木子は見覚えがあつた。プロダクションに半年足らず勤めて辞めた女事務員である。

「茶番としか言ひやうがないわよね。陳腐な茶番。あたし、うんと笑つてやらうと思つた。でも、笑へなかつたんだから、あたしも、器量が小さいんだなあ」

京都のホテルのベッドに腰掛けて、町並の向うの山に暮れ方の陽が染みるやうに射すのを眺めながら、真木子はかう言つた。

「あたしは、彼と別れる時が来るなんて、想像もつかなかつた。ずつと一緒にゐるんだらうと思つてたわ。恥しいけど、今、彼が歸つて来たとしたら、あたし、受け容れちやふだらうな」

「倅せが明日にも戻つて来るかも知れないつてわけか」

わざと意地悪く、堯彦は言つてみた。真木子の口調に、微かな甘えがあるのに、彼はこだはつてゐた。

「傍で聞いてると、をかしな気がするよ。一体、五年もの間、どんな風に暮してゐたんです」

真木子は、このむきつけな間に曖昧に首を振つて答へなかつた。そしてそれ以後、過去に触れるのを避けるやうになつた。だから、前の男との間の詳しいゆくたてを堯彦は知らない。

真木ちゃんを見てゐると危かしくて仕方がない、と伊月祐子が言つたのを、彼は聞いてゐる。

感情に突き飛ばされでもするやうに、何かに熱中しないではゐられぬ真木子の性格を、長く近くに住み、友だちといふより、むしろ姉のやうな位置から接して来た祐子は知り抜いてゐたのであらう。或いは、真木子が堯彦に深入りしなければいいと思つてゐたかも知れない。しかし、好きな時に行つて長居が出来る祐子の家の気易さは、より早く二人の親しみを増す結果になつた。車を買ひ替へた機会に、真木子が遠出をしようと誘ひかけたのは、識り合つて三月に満たぬ頃である。

初めての日は油壺へ行き、夕方には戻つて来た。だが二度目、秋の深い季節に青梅へ行つた日は、当然のやうに歸らなかつた。夜更けて、真木子は窓を明けたがつた。山あひを縫ふ川の流れの音が、湿つた夜氣とともに満ち、拡がるなかで、真木子は腹這ひになり、顔だけを堯彦の方へ向けて、軽く眼を閉ぢてゐた。

「気持がいい」

と歌でも口ずさむやうに彼女は呟いた。

「水のなかに漬かつてゐるみたい。冷いのはいいわ。昔、川で溺れかけた事があるの。知らない間に、流れの早い所に出てゐたのね。お腹から下の水が急に冷くなつて、すごい力で引張られて。今でもあの感じ、よく思ひ出せるわ」

堯彦は、紅を落した真木子の唇が、緩やかに動くのをみつめてゐた。かつて真木子が溺れた水と、窓の外の流れの水とが一つになつて、彼の身体の裡を過ぎて行くやうな気がした。やがて、そのまま真木子は眠つた。

これが丁度四年前の事である。その四年の間に、映画の全盛期は去つて行つた。堯彦の同僚にも見切りをつけて退社する者が出始め、真木子のプロダクションは、テレビに食ひ込まうとし

て、無駄の多い努力の繰返しを強ひられるやうになつた。しかし、さういふ周囲の変化が、彼等の間で話題に上つたためしはない。互ひに誘ひ合つては小さな旅に出、たわいもなく夜を過すやうな習慣が跡切れ勝ちながらに続いてゐた。真木子は堯彦のアパートへ来ようとせず、街のホテルへ泊るのも肯じなかつた。堯彦との仲に、けぢめもなく深入りするのを怖れる氣持があつたせゐだらうか。

真木子が、大阪の広告会社から招かれてゐると打明けたのは、さうした旅の歸りの列車で、しばらく黙つてゐたあとであつた。

「行かうかと思つてゐるのよ」

陽も射さぬのに、窓の遮蔽幕を引下して真木子は言つた。

「今の所も、先の見込みなささうだし、それにもう、飽きちやつたしね」

「飽きちやつたか」

と堯彦は、前夜遅くまで、真木子が宿の娯楽室のスロット・マシンの前を動かうとしなかつたのを思ひ出し、こんな旅の繰返しにも、彼女は少しづつ飽きて來たのだらうと考へた。時折り通り過ぎる氣だるいやうな退屈は、彼にも覺えがあつたのである。

真木子と結婚すれば、と考へないわけではない。旅先での朝、真木子は早く起きて、湯をもらひに行き、独りで熱い茶を淹れて、砂糖をまぶした梅干を食べるのが好きであつた。意外につましい感じのするその動きを、堯彦は寝たままで眺めて、真木子は家計にも細かいだらうかと思つたりしたが、その思ひは、どこか現実味に欠けたところがあつた。

製作本数の削減とともに、撮影所は眼に見えて暇になつてゐたが、若い者の多い宣伝部には、最盛期の頃の活氣の名残りがあつた。昼の休みに俳優たちが集つて、さいころの博打に僅かな金

を賭け、けたたましい笑声を挙げるやうな風も遣つてゐた。職場が確実に狹められて行く不安をまぎらすために、誰もが目前の仕事に打込み、賑やかにしてゐたのだとも言へる。そんな流れに身を任せて、彼は、三十歳を過ぎてまだまだ、実生活に関はるのを躊躇つてゐた。

「大阪もいいだらうね」

と彼はお座成りに言つた。

「尤も、大阪弁には閉口するけどね。あれで凄まじれると、本当に怖いといふよ」

このときも、真木子は曖昧に笑つたきり、口を噤んでゐた。

しかし、真木子の大阪行きは実現しないで終つた。どんな事情があつたのか、堯彦は知らない。真木子が何を考へて意志を変へたのかも判らない。ただ彼は、この事があつたために、真木子の感情の動きに、より深く気を引かれるやうになつた。長く続き過ぎた関係は、却つて理解を妨げてゐるのかも知れなかつた。鷹舞への旅は、たまたま伊月祐子が、もう直き町の祭の季節になると言つたのを聞いて思ひ立つたのだつたが、堯彦の裡には、変化を求める気持が確かに動いてゐた。鷹舞が自分の祖父や父、そして祐子の父にも繋がる町だと、真木子に詳しく説明したのもそのせみである。

「あなたのお墓へ行きませう。お掃除くらゐしてあげるわ」

と聞き終へて真木子は言つた。先祖代々の墓地が世話する者もなく草に埋もれてゐるさまを想像したのであらう。

鷹舞の宿はしんとして、彼等のほかに客の気配はなかつた。真木子は、女中が牀を延べるのを待ち兼ねて横になり、明るい水色の夏掛けを耳のあたりまで引上げて、眼を瞑つた。彼女はいつも、息遣ひも感じさせないほど静かに眠つた。

堯彦はそつと部屋を出た。緩やかな太鼓の音が跡絶えずに流れてゐる。山車が通りのどこかに止つてゐるのであらう。その方へ行つてみるつもりであつた。

町の地形は、祐子に教はつてほぼ憶えてゐた。宿の前の道を真直ぐに北へ行くと、昔、領主の館があつたといふ城山に突当る。頂上近くから二本の松が、兜の前立のやうに突出した山である。城山の手前五百米ばかりは、道幅が拡がり、両側に旧藩時代の上級武士の邸が、松や樅の深い木立に隠れて建並んでゐる。その中程の一軒の前に、ビニール・シートの仮屋根を張つた山車が停つて、囃子はそこから聞えた。城山を覆ふ草の色が、明るく際立つて、絵を貼付けたやうに見える。

宿で借りた番傘に、梢から落ちる雨滴の当る音を聞きながら、堯彦は、かつて祐子が町へ来た時には、澄んだ秋の午後の陽が、この通りにも溢れてゐただらうか、と思つた。

一度だけ、鷹舞のお祭に行き遭はせた事がある、と祐子は言つた。祭の季節に町の寺で、彼女の父の七回忌の法事が行はれたのである。

「父の命日は十二月ですけど、その頃は田舎は雪が降るから、法事を繰上げたのね。あたしは学校へ上る少し前だつたわ」

祐子は、堯彦の伯父祥一郎の娘である。昭和四年の夏、彼女が生れた時には、既に祥一郎は世を去つてゐた。

「お斎が始らうとした時に、ちやうど山車が門の前に来たの。あんまり賑やかなんで、あたし、つい行かれて見に行かうとして、母に叱られちゃつた。母は、集つた人たちに、弱い所を見せまいと、気を張つてゐたのね。あの甲走つた声、今でも忘れないわ」

上座にゐた親戚の老人が、そんな様子を見兼ねたのか、懷紙に小銭をくるんで、これをお祭の

小父さんに上げておいで、と渡して呉れた。祐子は境内を一散に駈けて山車に近付き、精一杯背伸びをして、太鼓を打つてゐる優しさうな男に、包みを差出した。男は愕いたらしく、手を止めてまじまじと祐子を見つめたが、やがて大声で笑つて、調子外れに高く太鼓を打ち鳴らした。また走つて法事の席へ戻ると、客に酒を注いで廻つてゐた母は、険しい顔で祐子を顧みた。

「憶えてゐるのは、それだけ。懐しいなんて思ふのは錯覚ね。もう一度行つてみる気はしないわ。盆暮にはきちんとお寺へお金を送つてゐるけど」

どうして行きたくないのか、とは堯彦は訊かなかつた。祐子の家の過去を、いささかは聞き知つてゐたからである。

河西祥一郎は、蒔絵の作者として前途を囑望された人であつた。美術学校を卒へたのち、美術界に影響力を持つ父河西青汀の庇護を受けて、才能は順調に伸びるだらうと予測された時期があつた。しかし、仲間に連れられて行つて識合つた芸者と深くなり、同棲してからは、事情は變つてしまつた。青汀は息子の遊びに寛大であり、小遣も潤沢に与へてゐたが、このときの女、佐世との結婚だけは頑なに許さなかつた。彼は、然るべき家から嫁を迎へて、河西家の基礎を固めようと考へてゐたらしい。東北の田舎を出て一応の成功を得た人間にとつて、無理のない感情の動きだつたとも言へる。だが、祥一郎も意地を通さうとした。二人の仲を心配して間に立つた人もあつたが、話はこじれ、青汀は祥一郎を廃嫡にした。戸籍には、「被相続人ニ対シ重大ナル侮辱ヲ加ヘタルニ因リ推定家督相続人廃除裁判確定」と書き込まれてゐる。大正十年の事である。

廃嫡が決つても直ぐに往き来が絶たれたわけではない。青汀は、祥一郎のために郊外の練馬に仕事部屋を建ててやり、生活援助の金も幾許かは送り続けた。破綻は二年経つた後に来た。祥一郎の右腕が、神経を犯されて自由を失つたのである。医師は心因性の病気だと診断し、佐世は父

親の苛酷な仕打ちのせみだと信じた。仕事を奪はれて祥一郎の生活は荒み、やがて心臓を病んで俄かに死んだ。憤死だと評した人があつたといふ。

祥一郎が死んで、佐世は河西の家から遠ざかつた。さして時を置かず、織物問屋の経営者から望まれて再婚したのを機会に、子供の養育費の名目の金も辞退してゐる。祐子の記憶にある七回忌の法要は、青汀が主宰し、佐世を招いたものであつた。長男を死へ追ひやつた事は、やはり青汀の負ひ目になつてゐただらうか。彼が何を考へたのかは詳かでないが、法要への招待が、和解の意志表示だつたのは、ほぼ確実である。だが佐世は、新しい夫の名で寺へ過分の布施をして、自分が既に他家の人間である事を示し、周りの人の効はりを籠めた言葉に、抄ばかしくは答へなかつた。祐子に見せた険しい顔には、彼女の気の昂ぶりが映つてゐたであらう。

堯彦が、祐子の家を足繁く訪ねるやうになつたのは、戦後である。昭和十八年の八月に、祖父青汀と父の珊吾が、僅か中四日を置いて死に、終戦の年には母も死んで、馴染みの薄い母方の伯父の許へ引取られた堯彦にとつて、気軽に顔出しの出来る親戚は、ほかになかつたのである。

「時代が変りましたね」

と佐世は機嫌よく甥を迎へて言つた。

「みんな死んでしまつて。新しい仏様は淋しがつて、早くお仲間を呼びたがるといふけれど、本当にさうのやうね」

彼女はいつも堯彦に優しく、食糧の足りない頃には、歸りがけに餅を持たせて呉れたりした。祥一郎の腕が麻痺してからも、珊吾は、荒寥とした兄の身邊を離れなかつたといふが、その時代の思ひ出が遺つてゐたのかも知れない。

佐世は堯彦が大学へ入る年に死に、その一周忌が済むのを待つて祐子が、婿を取る形で結婚し